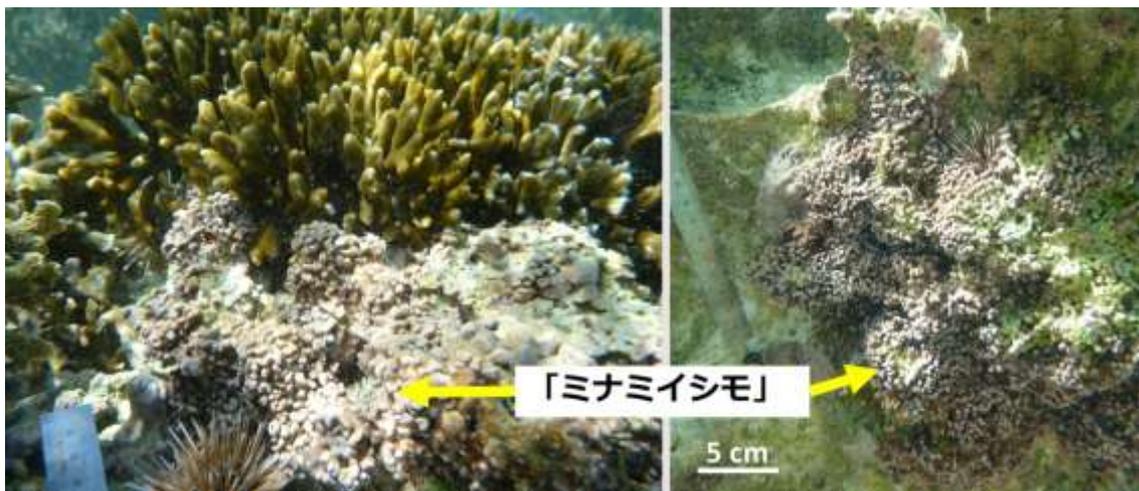


【研究成果】サンゴ礁をつくる石灰藻サンゴモ類の新種を記載

サンゴモ類は、体の重量の約9割が炭酸カルシウムで構成される海藻で、石灰藻とも呼ばれています。熱帯域においては、刺胞動物のサンゴと同様、サンゴ礁をつくる生物（造礁生物）として知られています。広島大学大学院統合生命科学研究科の加藤 亜記准教授と海洋生物環境研究所の馬場将輔博士の研究により、これまで太平洋西岸で「ミナミイシモ *Lithophyllum kotschy anum*」と同定されていた種に、この種は含まれず、新種を含む3種に相当することが明らかになりました。



(写真) 沖縄県今帰仁村で撮影 (2012年10月)

「ミナミイシモ *Lithophyllum kotschy anum*」は、サンゴ礁の浅い海でごく一般的に見られる枝状の石灰藻で (写真)、かつて紅海、インド洋～太平洋の熱帯域に広く分布するとされていましたが、形態および遺伝子データに基づく研究により、太平洋西岸では、*L. kotschy anum* ではなく、*L. kuroshioense* (新種)と *L. subtile*、さらに世界の熱帯域に広く分布する *L. kaiseri* の少なくとも3種が分布していることが明らかになりました。野外でこれらの種の違いを肉眼で区別することは難しいですが、こうした種の違いが、局所的な分布と関連していることが近年、世界各地で明らかになってきたため、今後の系統分類や生理生態に関する研究の進展が期待されます。

論文情報：

Kato, A. & Baba, M. 2019. Distribution of *Lithophyllum kuroshioense* sp. nov., *Lithophyllum subtile* and *L. kaiseri* (Corallinales, Rhodophyta), but not *L. kotschy anum*, in the northwestern Pacific Ocean. *Phycologia*

<https://doi.org/10.1080/00318884.2019.1643200>

(2019年9月9日オンラインで先行公開)